◆2022 年 2 月第 2 週の礼拝説教
■日時：2022 年 2 月 13 日（日）
■場所：立川教会
■説教題：後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ。」
■聖書：新約フィリピの信徒への手紙 3：12－4：1（p365）
■讃美歌：97「羊飼いの羊飼いよ」・227「主の真理は」

お早うございます。

先週の 2 月 11 日、立川教会は 1953 年の教会設立より 71 周年の時を迎えました。その前日の 2 月 10 日、一昨年から手掛けていた創立 70 周年記念誌が完成し、今、ここにいらっしゃる皆様のお手元にあります。オンラインで礼拝に参加されている方には、明日から順次発送して行きたいと思っています。

それにしても、大切な記念誌となりました。

何が大切かと言うと、30 名を超えて原稿を寄せて下さった方お一人おひとりの文章から、キリストに従う証しの言葉が溢れているからです。それらの言葉に対する私の感想は、教会

員及び関係者全員に記念誌が届いた後、来週の礼拝でお話ししたいと思います。

これらの言葉から明らかにされるのは、教会とはどのような所か、なぜ教会に通うのか、そして礼拝とは何かということです。読まれればお分かりになると思いますが、ある方は、幼い頃からの教会との関わりを述べています。ある方は、現在の自分の信仰の在り方を見つめ直しています。又ある方は、人生を振り返る中での恵みに満ちた神様への感謝の言葉を語っています。普段は言葉に出さずとも、この記念誌では語れる、語って良いのだとの信頼があってこその言葉だと思いました。私たちの交わりを基として、それぞれの心の中から引き出されて来ました。このような記念誌が私たちに与えられたことを神様に感謝しています。

ところで、オミクロン株の感染拡大は半端ではなくなりました。先週末では、都内で 80 人に 1 人の割合で、何らかの形で感染したか感染が疑われているとの報告が出ています。私の知人も夫婦共に罹患しました。幸いなことに、一緒に生活していた息子さんは陰性で罹りませんでしたが、罹らなかった理由として考えられたのは、息子さんは、殊の外感染

リスクに気を付けて生活していたようです。オミクロンは重症化しにくいと言われていますが、高齢者や基礎疾患を持つ者には決してそうではありません。くれぐれも、出来る限りの感染対策をしながら生活して行きたいと思います。

さて、今日与えられた聖書の御言葉を見てまいりましょう。フィリピの信徒への手紙第3章12節から14章1節です。まず、12節です。

１２：わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全なものとなっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。

使徒パウロの、ローマにおける獄中からの手紙です。

フィリピの教会は、ギリシャの北、マケドニア地方にあり、パウロの第2回伝道旅行の際に生まれたヨーロッパで最初の教会でした。その信徒たちにとって、自分たちに福音を宣べ伝えたパウロは、偉大な先達でした。しかし、パウロは語ります。私は、主イエス・キリストによって救われ、神の国に招き入れられるに相応しい完全な者となっているわけではなく、何とかしてそれに近づきたいと努めているのだと。何故なら、復活の主に出会った私は、そのあまりの素晴らしさに捕らえられているからだと。

13、14節です。

１３：兄弟たち、わたしは既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、

１４；神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目

指してひたすら走ることです。

さらにパウロは言葉を続けます。フィリピにいる愛する人たち、繰り返しますが、私は未だ完全な救いの道に至っているのではありません。私がなすべきことはただ一つのことです。それは、これまでの人生を振り返り、それがどれだけ懐かしさに満ちたものであっても、そこに後戻りするのではなく、今はただ全力を尽くしてキリストによって示された

道、救いに至る道を走り抜く事、神様が私に与えようとされている御国に向かう道をひたすら走り続けることですと。

15 節、16 節。

１５；だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことも明らかにして下さいます。

１６；いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

皆それぞれ、神様から与えられた道は違っています。パウロはそのことを認め、述べます。私は今、獄中に捕らわれている中で、それでもあなたがたに手紙を書き、励まし、ここで出来る福音宣教の業を成しつつ、私に示された道を歩んでいる。あなたがたは、私の苦しみを知って助けの手を差し伸べている。そうすることによって、私の宣教を支えている。いずれにせよ、神様は、神の国に向かう道を、私やあなたがたそれぞれに準備をして下さっている。その道を見出し、又、己の力に応じてその歩みを進めるようにと述べるのです。

ところで、17 節から、パウロはキリスト者の交わりについて語り始めます。私たちの交わりとはどのようなものであるのかについてです。

１７：兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。

そして、18、19 節。

１８：何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。

１９：彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。

私に倣う者となり、私たちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさいと言いつつ、自分達に敵対している者がいる現実を明らかにします。そして、厳しい言葉を語ります。彼らの行き着くところは滅びであると。

この 17 節から 19 節にかけてパウロが語っていることは、フィリピの教会の信徒たちが拠り所とすべき信仰の基盤についてです。しかも、「今また涙ながらに言います」と言う言葉から、今回初めて言うことではなく、これまで何度も繰り返し語って来た言葉です。

パウロの教えに反対する者たちが、彼に導かれて生まれた教会にやって来ては違った教えを語り、信徒たちを混乱に陥れました。あるいは、キリスト教そのものを迫害する者達が後を絶ちませんでした。こうした中で、フィリピの人々は、迷わされず、迫害にも屈せず、パウロの教えた十字架の福音にしっかり立ち続けていました。だからこそ、その信仰を守り抜くようにと、涙ながらに語るのです。

ところで、ここまで読み進めて、思うところがあります。

パウロが語る信仰者の交わりについてです。

この場に呼び集められた私たちにとって、礼拝とは何か、交わりとは何か、普段接している教会以外の交わりと何が違うのかと言うことです。

今現在、私は、教会以外に幾つもの交わりに招かれています。キリスト者による交わりもあれば、そうでない人々との交わりもあります。そこで出会う人々は、ほとんど例外なく、自分の家庭や仕事以外に他者の置かれている現実や社会の出来事に関心を持ち、少しでも生きやすい社会を造ろうと考え行動している、そのような人々です。自分の幸福だけではなく、他者の幸福にも心を向けている人々と言っても良いと思います。

しかし、キリスト者でない人々の場合、同じ課題に取り組みながら、それぞれが立っている基盤、拠り所としているものは違うように思います。課題は同じでも、取り組む際の拠り所が違うのを覚えます。何が違い、それによってどのような現実が生まれるのでしょうか。

そのことを解く鍵が 20 節、21 節です。

２０：しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。

２１：キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

つまり、どのような社会的、政治的事柄であっても、私たちが取り組む際の最後の拠り所は、国籍は天にある、本国は天にある、帰るべき故郷は神の国にあることです。信仰を持つ者と持たない者との違いは、そこにあるのだと思います。

さらに、もう少しこの問題を考えてみたいと思います

信仰を持つ者と持たない者と、何がどう違うのかと言うことです。そのことが、生きる上で、他者と交わる上で、何か決定的な意味を持つのかと言うことです。

昨年の 12 月 26 日、2021 年最後の主の日でしたが、この 4 月から赴任する小高伝道所で一日遅れのクリスマス礼拝が行われました。近隣の諸教会から、近隣と言っても、車で 1 時間も 1 時間半もかけて仙台から来られるのですが、全部で 23 名が集まり、会堂はいっぱいでした。そして、クリスマスの讃美歌が歌われました。その迫力に心が震えました。男女を問わず、素晴らしい声の方がいらしたこともありましたが、コロナの感染が少しだけ収まっている時期でもあり、久しぶりに会堂いっぱいに讃美の声が満ちたのです。

そして、今、改めて思い知らされるのです。

あの時、そこに集まられた方は、私が初めてお会いする方も少なくなく、どのようなお考えの持ち主でいらっしゃるかは分かりません。政治に対し、社会に対し、私とは違った考えをお持ちの方もおられたと思います。生い立ちも、生きて来た人生も、今負っている課題も異なります。にもかかわらず、讃美する時、祈る時、御言葉に耳を傾ける時、心は一つとなりました。

私は、キリスト者の交わりとは、ここにあると思います。

皆それぞれ違うのです。違って良いのです。世に生きる在り方、政治や社会に向かう在り方、違って良いのです。そして、世にあって、それぞれの生き方や関心の持ち方がどのようであっても、ただ神様の前にあってはその思いは砕かれ、虚しくされます。そして、一つとなって祈り、讃美し、御言葉を聞くことが出来る。それがキリスト者の交わりだと思うのです。故郷が天に無い時、人はこの地上での在り方が全てになります。この地上で相容れない者同士は、相容れないままに人生を終えなければなりません。

しかし、故郷を天に持つ私たちにとって、この地上での在り方は、神様の前にあって、皆等しく相対化され、虚しくされます。自らの手に神の義はなく、御前に跪けるのです。

マルコによる福音書の講解説教のまとめでも触れましたが、イエス様に敵対している律法学者の一人はその信仰が賞賛されました。イエス様を十字架に架けて殺したローマ兵の百人隊長が、十字架のイエス様の最期を見届ける中で、「まことにこの人は神の子であった」と信仰を告白しました。律法学者と同じくイエス様の敵対勢力である最高法院の議員であったアリマタヤのヨセフが、誰も引き取り手のいない重犯罪人として処刑されたイエス様の遺体の引き取りを申し出、自分の墓に収めました。

この世にあっては、律法学者も、百人隊長も、議員も、皆イエス様の敵でした。

しかし、彼らは、皆、イエス様との関わりを通して、その視線の先に神の国を捉えたのです。キリストの前に、十字架の前に、それぞれの社会的立場、政治的役割は虚しくされ、

キリストに跪きました。

最後の 4 章 1 節です。

１：だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する

人たち、このように主によってしっかり立ちなさい。

1 節には、パウロのフィリピの人々に対する愛情が滲み出ています。

愛し、慕い、喜びであり、冠であると。

パウロがここまで愛情を込めて呼びかける場面は、他のどんな手紙にもありません。

ここだけです。

即ち、パウロにとってフィリピの人々がどのような人々であったかが分かります。

愛する人々であり、慕う人々であり、喜びであり、冠であると。

果たして、私たちに、このパウロのように呼びかけることの出来る人たちがいるでしょうか。

獄中にあっても、フィリピの人々は、パウロにとって慰めであり、喜びであり、誇りであり、希望でした。

しかし、私は思います。

そのような人々が私たちに与えられているかではなく、そのように思われる、即ち、友が困難な中にあった時、慰めとなり、喜びとなり、誇りとなり、希望となるような、そのような人になりたいと思います。

祈りましょう。